

序 文

名和敏光

本號は、2004年3月に創刊號が、2005年12月に第二號が刊行されたのを受けて刊行する第三號であり、「上海博物館藏戰國楚簡研究會」（通稱は、「上海博楚簡研究會」）の研究成果を内容としている。

この研究會は、上海古籍出版社刊『上海博物館藏戰國楚竹書』（一）～（五）をテキストとして、ほぼ月一回のペースで、東京大學本郷キャンパス及び日本女子大學目白キャンパスにおいて、土曜日午後に行われている、公開の研究會である。以下に、研究會の發表者（敬稱略、職は發表當時）、發表の題目、開催の時期・場所などを記す。なお、前號發行以後『上海博物館藏戰國楚竹書』第五冊が2005年12月に出版されており、その内容は「競建内之」「鮑叔牙與隰朋之諫」「季庚子問於孔子」「姑成家父」「君子爲禮」「弟子問」「三徳」「鬼神之神」「融師有成氏」であり、2007年4月末現在、この第五冊まで會讀が進んでいる。

- 第14回 2005年4月23日（土） 於東京大學
『中弓』を讀む（前編） 名和敏光（山梨県立大學助教授）
- 第15回 2005年6月4日（土） 於東京大學
『中弓』を讀む（後編） 名和敏光（山梨県立大學助教授）
- 第16回 2005年7月2日（土） 於東京大學
『彭祖』を讀む 小寺敦（日本學術振興會特別研究員）
- 第17回 2005年10月1日（土） 於東京大學
『内豊（禮）』を讀む 井上亘（立教大學非常勤講師）
- 第18回 2005年11月19日（土） 於日本女子大學
『曹沫之陣』を讀む（前編） 大西克也（東京大學助教授）
- 第19回 2006年1月14日（土） 於日本女子大學
『曹沫之陣』を讀む（後編） 大西克也（東京大學助教授）
- 第20回 2006年3月25日（土） 於東京大學
『東大王泊旱』を讀む（前編） 元勇準（東京大學大學院生）
- 第21回 2006年4月22日（土） 於東京大學
『東大王泊旱』を讀む（後編） 元勇準（東京大學大學院生）
- 第22回 2006年5月20日（土） 於東京大學
『昭王毀室・昭王與龔之旃』を讀む 廣瀬薫雄（日本學術振興會特別研

究員)

- 第23回 2006年7月8日(土) 於日本女子大學
『『鬼神の明・融師有成氏』を讀む』西山尚志(山東大學大學院博士課程)
- 第24回 2006年9月16日(土) 於東京大學
『『采風曲目』『逸詩』を讀む』原田春子(東京大學大學院生)
『『相邦之道』を讀む』吳田志穗(大東文化大學大學院生)
- 第25回 2006年11月11日(土) 於日本女子大學
『『姑成家父』を讀む』戸内俊介(東京大學大學院生)
- 第26回 2007年4月21日(土) 於日本女子大學
『『三徳』を讀む(前編)』矢野研介(東京大學大學院生)

さて本號の内容であるが、小寺敦氏の『彭祖』(第三冊)、井上亘氏の『内豊』(第四冊)、大西克也氏の『曹沫之陳』(第四冊)の譯注である。小寺敦氏は2006年4月に東京大學東洋文化研究所の准教授に着任され、また2006年10月から2007年3月まで復旦大學文物与博物館學系において研修をされた新進氣鋭の研究者である。今回の譯注では、歴史學的な視點を基に思想史の面でも讀み應えのある譯注を書かれている。井上亘氏は2006年4月から中國天津南開大學日本研究院に着信され、中國からの最新の研究情報を寄せてくれることが期待されている。今回の譯注では、音韻の面で堅実な成果を提供してくれている。大西克也氏は古代語法に關しては現在第一人者と言っても過言ではなく、語法・音韻・文字にわたり非常に詳細な譯注を作成して下さった。どの譯注を取っても最新のそしてハイレベルのものであり、必ずや研究者の知的好奇心を満足せしめるものであることを確信してやまない。

最新の出版物として、復旦大學出土文獻與古文字研究中心編『出土文獻與古文字研究【第一輯】』(全347頁)が2006年12月に復旦大學出版社より出版された。この論文集においても『上海博物館藏戰國楚竹書』収録の諸編を扱った論文が17本の中5本という數字からも、その注目度が伺われよう。

また、『上海博物館藏戰國楚竹書』第六冊が近日出版されるということが編著者の濮茅左氏より報告されている(簡帛研究 <http://www.jianbo.org/>)。その内容は、「競公瘡」「孔子見季走互(桓)子」「莊王既成 申公臣靈王」「平王問鄭壽」「平王與王子木」「慎子曰恭儉」「用日」「天子建州」ということである。本研究會において今後も會讀を様げたいと考えているところである。

なお最後になるが、本號の刊行は第一號・第二號と同様、李承律氏のご苦勞に全く依據している。ご自身の公務及び論文執筆など多忙を極める中、嚴密な編集をされ、更に資金に關しても非常に苦勞をされている。(また本會の紹介を兼ね、『東方』315號(2007年5月)に「【研究會紹介 10】上海博楚簡研究會～地味から創造へ～」を寄稿さ

れている。) この點、一参加者として非常に頭の下がる思いである。記して、その苦勞を讃えたいと思う。

2007年5月5日擱筆

*なおこの文章は、2006年11月18日に行われた大東文化大學人文科學研究所研究班報告會（大東文化大學板橋校舍2-0207會議室）において報告した内容に加筆をしたものである。